令和六年　弥生　758号

むなかた

目次

令和六年能登半島地震支援　3・2
氏貞公墓前祭　4
宗像祖霊社　春季大祭　5
春季大祭　ご案内　5
神宝館だより・みこころ　6
宗像大社歌会詠草　7
御造営奉賛者御芳名　7

よって、神宮式年遷宮とは、二十年に一度宮処（みやどころ）を改め、古例のままに社殿や御装束神宝をはじめ全てを新しくして、御神体を新宮へお遷しする神宮最大の重儀である。現在、御正宮が建つ場所の隣には「古殿地（こでんち）」と言われる次の遷宮の際に、新たに社殿を建立する敷地がある▼昨年十二月に福岡県神道青年会の事業の一環として、神宮参拝並び古殿地清掃奉仕が行われた▼現在の古殿地は平成五年から平成二十五年までの二十年間、御正宮（ごしょうぐう）が建っていた場所で、次の式年遷宮では「新御敷地（しんみしきち）」となる。もちろん普段は神宮の神職しか立ち入る事のできない場所であるが、ご厚意により清掃奉仕を許された▼当日は、うっすらと白みがかった神聖な空間に陽の光が差し込み、神々しさを感じた。多くの杉の落葉を拾い集めながらも、横を向けば間近に迫る御正宮は悠久の歴史を感じる厳かさとともに、二十年毎に斎行される式年遷宮によって生まれる、新しい美しさも兼ね備えていた▼現在の古殿地に再度足を踏み入れる機会があるとすれば三十年以上も先の事になる。その時間の長さを考えるとこの度のご奉仕は非常に感慨深いものがあった▼神宮が体現する「日本のこころ」に触れ、美しい自然に包まれた御神域の清浄なる空気を肌で感じながら、神に仕える者としての原点に立ち返る事ができた一日であった。（武）

令和六年能登半島地震
古き縁により輪島市海士町を直接支援

織幡神社（鐘崎）境内に立てられている海女の像

奥津比咩神社里宮造営10周年記念　昭和60年

輪島キリコ会館を視察する鐘崎漁協の一行

元日に発生した能登半島地震に対し、当社では本殿前に被災地の神社復興募金を設置していたが、この度、石川県輪島市海士町（あまちょう）への義援金箱を新たに設置した。

海士町は現在も海女漁が盛んな地域であるが、「海女発祥の地」とされる宗像市鐘崎の海女たちが海の幸を求めて移住したところである。

『海士町開町三五〇年記念誌』によると、永禄十二年（一五六九）九州筑前国鐘ケ崎（現在の宗像市鐘崎）から海士の又兵衛ら男女十三人が能登半島に渡って漁業を営み、秋には郷里宗像に帰り、春には能登に渡るという生活を続けたため、地元民からは「西国海士」と呼ばれた。海産物が豊富だった能登への往来はそれ以降も続き、元和三年（一六一七）には輪島市に十四戸の家を建て、七ツ島や舳倉（へぐら）島に渡って貝や海藻を採取し生計を立てた、とある。

その後人口も増え、加賀藩より千坪の土地を拝領し、移住したのが海士町の始まりとされている。

また舳倉島に鎮座する奥津比咩（おきつひめ）神社は鐘崎から渡った海士町の先祖が宗像大社のご祭神・田心姫神を奉斎したと伝えられている。時代の変化とともに人々の生活基盤が島から輪島市方面へと移ったため、昭和五十年（一九七五）輪島市内に同神社の社殿や氏子会館を建立して里宮としている。

大正六年（一九一七）発行の『筑豊沿海誌』に、輪島の海士町が鐘崎海士の後裔であると発表されてから双方の関心が高まり、漁業従事者や神職が互いに行き来する交流がなされるようになった。

また昭和三十九年十月に行われた、東京オリンピックに水泳選手として出場した海士町出身の山中毅氏の先祖が、鐘崎の人であるとして岬校区一丸となり応援署名と寄付金を募る活動を行ったとの記録も残っている。

これらの関りを知る地元の方々から発災後、相次いで支援の申し出を受けた宗像漁業協同組合と当社は、これらの縁を足がかりに海士町への直接支援へと動き出した一つが、この度の義援金箱の設置である。

被災地全域が一日も早く平穏な日々が戻るよう祈るばかりであるが、このような深い歴史的交流が周知され、一人でも多くの方々が被災地に心を寄せるきっかけとなれば幸いである。

氏貞公墓前祭

例年三月四日は当社第八十代大宮司宗像氏貞公墓前祭が斎行されている。

この墓前祭は氏貞公逝去四百年忌にあたる昭和六十一年に当社と菩提寺である承福寺との墓碑保存の協議により神道式と仏式で隔年毎に墓前祭を奉仕する事が定められ、現在に至っている。当社、承福寺関係者のみならず、宗像家へ仕え又、代々墓守を務めてきた占部家、更には墓所のある上八今門地区の人々に参列いただき、氏貞公の威徳を偲んでいる。

宗像氏貞公が活躍した、室町時代末期は筑前及び周辺地域で大友・龍造寺・毛利氏が衝突する厳しい時代であった。この地方の諸勢力はその時々の情勢を判断し行動しなければ滅亡する時代であった。このような困難な時代に大宮司職を継いだ氏貞公は深謀遠慮を巡らし神郡宗像を外敵から守り、宗像大宮司家の再興を図り、戦乱に被害を受けた社寺の復興にも努めた。

弘治三年(一五五七)本殿内陣よりあがった火は本殿・拝殿を焼き多くの神宝が灰塵に帰した。それから約二十年の時を置き、天正六年(一五七八)に氏貞公が厳しい情勢の中、再建されたのが現在の辺津宮本殿である。これ以外にも神郡内の荒廃した社寺の復興、現在の上八(こうじょう)地区辺りの田地を御神米用地として寄進、神社の改革(祭祀の厳正化等)等、宗像大神の神威の護持に努めた。

しかし、志も半ばの四十二歳病没する。侵略の隙を与えない為、その死は三年間秘匿される事になり、亡骸は側近により密かに現在の地へ埋葬され、代々占部家の一族が守ってきた。その後、跡継ぎの居ない宗像大宮司家は断絶となった。

墓前祭を通し戦国乱世の混迷する時代に大社を守り抜いた中興の祖・氏貞公の生涯に思いをはせ更なる神道教化に心を尽くしたい。

●氏貞公墓前祭

三月四日(月)　十一時

氏貞公墓前(宗像市上八一四二四―三)

宗像祖霊社　春季大祭

春分の日である三月二十日午前十一時、宗像祖霊社にて春季大祭が斎行される。

木村信徒会会長を始め約二〇〇名の信徒らが参列のもと、神職が祝詞を奏上し祖霊の平安と各家の家門の隆昌を祈る。

宗像祖霊社とは、信徒会各家のご祖先の御霊（みたま）をお祀りしており、神葬祭（神道式での葬儀）や年忌祭、春秋彼岸の中日に大祭が執り行われている神社である。

その歴史は、明治六年宗像市吉田の地に祠が建てられたのが始まりとされ、明治二十四年現在の地（宗像市深田）に移転建立された。現在の社殿は平成元年に全面改築されたものである。江戸時代の寺請制度によって葬儀は仏式にて行われることが主流となったものの、明治時代になり宗像大社が鎮座する神郡宗像で生まれ育った地元の方々が、神道で祖先を祀りたいという機運が高まり建立された背景がある。

日本人には古くから、人は亡くなってもこの世にとどまっていつでも子孫を見守ってくれている存在と考え、祖先を大切にし、祖先を偲んできた。祖霊を祀る信仰は古来から日本人が行って来たことであり、神道の大切な信仰のひとつともいえる。

宗像祖霊社

春季大祭　ご案内

一年に一度、虫干しを兼ねて宗像大社で所蔵する神宝や古文書を一般公開していた「保存会」に始まるお祭りです。農家の種蒔きの時期にあたり、一年の五穀豊穣を祈って「主基地方風俗舞」と地元中学生による「浦安舞」が奉奏されます。

三月三十一日（日）
十七時　総社地主祭
十八時　宵宮祭

四月一日（月）
十一時　春季大祭
（主基地方風俗舞奉奏）

四月二日（火）
十　時　高宮祭、第二第三宮祭
宗像護国神社春季大祭
十一時　春季総社祭（浦安舞奉奏）

神宝館だより 83
八万点ノ国宝収蔵

宗像大宮司氏貞感状写

宗像社と人々（了）

中世に宗像氏の家臣として活躍した一族の、その後を垣間見れる文書がある。画像の史料は、元は紙を貼り継ぎ、一通として作成された。画像下部の「宗像大宮司氏貞感状写」はこれまでにも何回か取り上げた中世の書状の写であるが、この写には、その作成理由が書き添えられている。

感状の受給者である石松典宗は宗像氏貞の家臣。戦国期に活躍し、その戦功を称える書状が多く残されている。この宗像大宮司氏貞感状写もそのひとつであるが、画像上部の箇所には、これが江戸時代に作成された写であり、原本は石松家のある人物が武家奉公に出る際に貸し与えた、とある。先祖の戦での活躍を示し、家の由緒を証明する書類として扱われたのだろう。写は文体・年号・月日や宛名の位置まで正確に書写したともあって、当時にも書状が大事にされ、先祖の活躍を伝えていたことがうかがえる。（津）

みこころ

桃の花香る季節となりました。皆様いかがお過ごしでしょうか▼先月当社では、節分祭が行われました。当日当社にて行われた豆打ち式に参加させて頂きました。多くの方に参拝頂き、賑わいを感じました▼また四月には春季大祭が行われます。春季大祭では五穀豊穣を祈り、主基地方風俗舞や地元中学生による浦安舞が奉納されます。ぜひお越しください▼私は宗像大社に奉職し、早一年が経とうとしています。今年は先輩方にたくさんの事をご指導していただきました。お仕事を教わりながら、琴や舞などの巫女でしか出来ない貴重な経験をさせていただいております。始めたての頃は、琴も舞も難しく心折れそうでしたが先輩方が親身になって教えていただいたおかげで少しは上達し、琴も舞も今では好きになりました▼初めての経験も多く大変だと感じる事も多々ありましたが、そのおかげで社会人として成長できたと思います。これからも周りの方々への感謝の気持ちを忘れずにご奉仕していきたいです。（堂）

第751回　宗像大社歌会詠草

■大西晶子選　■毎月25日〆切（順不同）

木に熟れて黄色きカボスと言い添えて六個渡せばメロンパンになる　吉﨑美沙子

完熟のカボスをあげたらお返しにメロンパンをもらったという〈わらしべ長者〉のようなできごと。カボスがメロンパンになったという表現が面白い。

長男の入学式の日の写真枝垂桜に輝くボタン　早川　祥三

初々しい入学式の制服すがたが目に浮かぶ。上の句下の句両方が体言止めでばらばらな感じがするので下の句を〈桜の下でボタンかがやく〉としたい。

姉ばかり生れなかった待望の男生れる桃の節句に　秋吉　嘉範

内容がとても面白い。この歌の待望の男児は作者自身ということなので〈待望の男児なるわれは生まれたり姉おおき家の桃の節句に〉としてみた。

黒帯から空手を学ぶ五歳児ら白、黄、オレンジの帯固くしめ　萩原　勉

子供達の空手教室の練習風景。黒帯が先生で子供たちの帯の色は達成度によって異なるのだろう。結句で子供達の真剣さが伝わってくる。

誰だろう誰かがわたしを呼んでいる沼にさざなみ村社への道　山﨑　公俊

村社への道を行く作者は誰かに呼ばれているような気がしたのだ。村社に祀られた神様に呼ばれていたのかも、と思わせる不思議さが魅力的な一首。

遠く見上げ「ととさんかかさんが迎えに来よんなる」祖母死して半世記　本田エリナ

作者の自解によれば祖母が亡くなる数日前の言葉だという。破調の歌だが、作者の衝撃を表現するのには合っているように思う。

寒い夜ことことことととひびく音金柑を煮る母が振り向く　堺　玲子

金柑の甘露煮を母が煮ているのだ。初句から背中を丸めて煮物をする母を想像した。三句のひびくは煮物の音には大きい感じなので〈鍋の音〉などに。

柏手の音透きとほる凍つる朝悴む指を煩に押し当つ　東　雅子

凍てつく朝の空気の感じが聴覚であらわされ、かじかんだ指を頬にあてるところは触覚と多面的な表現。冷たい指を頬で温めたのなら結句は〈頬で温める〉としても良い。

◆選者詠

ときをりは笑ふこゑして春ひと日わかき庭師ら剪定をする

音をたて梅のえだ剪る大鋏ときに春陽をかへしてひかる

第721回　俳句

未来への眺透（ながめ）かして松手入れ　早川　祥三

御造営奉賛者御芳名

（令和六年一月）（順不同・敬称略）

五〇、〇〇〇円

福岡市　赤間　正和

一〇、〇〇〇円

福岡市　藤山　真司
北九州市　赤木　慶三
北九州市　土谷　ゆみ
横浜市　細田　優子
甲府市　鈴木　宜忠

五、〇〇〇円

北九州市　赤池　泰平

三、〇〇〇円

大阪市　福地　昭義
筑紫野市　伊藤　ゆか

お知らせ

神縁品の授与終了について

正月から授与しておりました、破魔矢や熊手などの神縁品は二月末日をもちまして授与を終了させていただきましたのでお知らせいたします。

また一年間、お祀りいただきましたお守りお札、神縁品は本殿のお守り授与所に設置の返納箱へお返しください。

むなかた
弥生（やよい） 第758号
2024年3月1日発行（月刊）／宗像大社　〒811―3505　福岡県宗像市田島2331　電話（0940）62―1311（代）　https://www.munakata-taisha.or.jp/

3月 まつりごよみ

1日	総社月次祭 引続き　高宮祭、第二宮第三宮祭 宗像護国神社祭	午前11時
4日	氏貞公墓前祭（神式） 宗像市上八1424-3	午前11時 氏貞公墓前
15日	総社月次祭 引続き　高宮祭、第二宮第三宮祭	午前11時
19日	松尾神社祭	午前11時
20日	春季皇霊殿遙拝式 宗像祖霊社春季大祭	午前10時 午前11時
31日	春季大祭宵宮祭	午後 6 時

編集後記

二月中旬、沖ノ島勤務へ行ってきた。玄界灘の絶海の孤島である沖ノ島はまさに自然との共生である。波が高ければ勤務交代は延期。台風が直撃すれば自然の恐怖を感じずにはいられない▼沖津宮の社殿が建つ場所は周辺を囲むように巨岩が聳え立ち、まさに神聖な場所、神の領域と言っても過言ではない▼毎朝の日供祭をはじめ、年間の祭典は辺津宮、中津宮と同様に行われる。ただ違うのは、神主ただ一人であることであろう。島の中腹に位置する社殿では波の音や島の周囲の音はほとんど聞こえてこず、神と対峙する厳かな時間がそこには流れている▼この時間は、神主としてあるべき姿と祈りの本質を再度奮い立たせてくれる時間でもある。この心を忘れることなく、次のステージへと歩みを進めたい。（黒）

宗像大社